

北方圏における子どもの生活とあそび：離島(利尻島)における幼児の生活・あそびに関する予備的研究

著者	請川 滋大, 滝澤 真毅, 結城 孝治
雑誌名	北方圏生活福祉研究所年報
巻	8
ページ	39-47
発行年	2002-10-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001512/

北方圏における子どもの生活とあそび

－離島（利尻島）における幼児の生活・あそびに関する予備的研究－

請 川 滋 大（北海道浅井学園大学短期大学部・北方圏生活福祉研究所）

滝 澤 真 毅（釧路短期大学・北方圏生活福祉研究所）

結 城 孝 治（北海道大学教育学研究科・北方圏生活福祉研究所）

抄 録

我々は北方圏の離島である利尻島を訪問し、子どもの日常生活と遊びについて調査を行っている。本研究では、島にある保育所及び幼稚園の教諭にインタビューを行い、さらに保育所で子どもたちの保育観察を行った。その結果、島での遊びと島外での遊びについて、とりわけ顕著に異なる部分というのは見られなかったが、島で見られた慣習と子どもたちの人間関係の中にいくつかの特徴的な部分を見いだすことができた。それらは概して、過疎化した地域と関係づけられる特徴であると思われる。

キーワード：離島，地域環境，保育所，子どもの遊び，人間関係

I. はじめに ーなぜ離島研究を行うのかー

我々は地域特性に即した生活環境と、そこに生活する子どもたちの発達とのかかわりについて興味を抱いており、とりわけ北海道を中心とする北方圏の子どもたちの生活について、多面的な接近を試みつつあるところである（請川・滝澤 2001）。今回、その一環として、利尻島の保育所と幼稚園の子どもたちの生活とあそびに焦点をあてた一連の研究を行った訳であるが、なぜ「離島」を選んだのかということが疑問として残るかも知れない。「離島」という言葉のイメージから、単純に何か本島（ここでは北海道ということになるが）とは異なった生活がそこにはあるのではないか、という考えがまず連想される。それは例えば、自然環境の豊富さ、人間関係の緊密さ、また不利な点として交通の便と商品の流通の不便さなどが挙げられるであろう。このような社会・自然環境的状况が、子どもたちの遊びや生活にどのように影響を及ぼしているのか、というのがまず本研究の出発点である。

II. 先行研究

ここからは、子どもの生活をテーマに国内の離島を調査した研究を概観してみたい。まず東京都立大学のグループが、小笠原諸島をフィールドとし、そこに住む子どもたちの意識調査などを様々な観点から行っているの

で、それらを取り上げてみたい。

文野・尾見・可知（2001）は、小笠原に住む小・中・高校生の自然意識について、特に動植物の知識ということに視点を置き質問紙調査を行っている。子どもたちが、「小笠原に生息する動植物とどのように関わり、どのような知識を持ち、それらの知識をどこから得ているのか」（p.1）を、彼らの生活環境との関係から述べている。ここでは、島外の子どもたちと比較調査を行ったわけではないので、島の子どもが特別深い知識を持っているのかどうかは分からない。だが、それが固有種か否かにかかわらず、彼らの身近に観察される動植物についてはよく見聞きしているようである。この点は、同じ東京都民として23区内に住む子どもらと比べて、より自然に親しんでいることを示唆しているのではないだろうか。

菅野・岡本・亀井（2001）は、小笠原村に在住する母親に対して、育児環境とネットワークについての質問紙調査の結果を報告した。子育てに困難を感じる母親をサポートするのは、地域の子育て環境であり、人的なネットワークであるということは周知の事実である。それを彼女らは、離島というサイズが小さい環境を対象にすることで、環境に対する意識や人間関係（ネットワーク）の構造を明らかにしようとしたものである。結果として、自然環境の豊かさと人間関係の濃さをあげているが、逆に生活の不便さや元々島に住んでいる人たちへのとけ込みにくさなどを感じている部分もあると報告している。

次に沖縄の離島を調査した宮内（1999）について検討

したい。ここでは、沖縄の離島部にある幼稚園を対象に、そこでの園生活を描き出すエスノグラフィーに取り組んでいる。彼は、沖縄が島嶼から成り立つ社会であることを述べ、「島としての特性がより鮮明に出るのではないかと素朴に考え、島に一つだけ存在する幼稚園を集中的に訪問した」(p.113)と記している。沖縄に48島ある有人島のうち、氏は5園の幼稚園を訪問している。そのどれもが、各島に一園しかないという条件になったところばかりである。この論文では、沖縄の幼稚園の特徴として、3つのポイントをあげている。それは、1つに大半が公立幼稚園であること、2つ目は大半が一年保育であるということ、そして3つ目小学校の敷地内にあることが多い、という点である。特にこの2つ目の点に関しては、我々の調査でも似たような感想を得た。それは利尻にある唯一の幼稚園も、一年保育だったという事実から得たものである。宮内氏は、その結論として、少々乱暴ではあると自戒しながらも、「沖縄県では幼稚園は『義務教育』の一環なのである」(p.116)と考察している。確かに、そのような側面もあるように思われるのだが、利尻では、それまで保育所に入っていた子どもたちも、年長になるとほぼ全員が保育所の隣にある幼稚園に入園し、年間だけの幼稚園生活を経験する。このことは先ほどのように、学校へ入るための準備としてという意味もあるだろう。しかし、果たしてそれだけなのであるか。学校へ入るための準備期間であれば、保育所でも良いのではないだろうか。この点に関する我々の考察については、後半で述べていきたいと思う。

さて宮内論文では、島に共通する問題として3つのトピックスを提示している。これを離島の文化とするには、「まだまだ根拠に乏しく、資料も満足ではない」(p.137)としているが、離島調査をするものに対し何らかの示唆を与えるものと捉え、ここで取り上げてみたい。

①離島と本島の園児たちとの違いは少ない

離島独自の子どもたちの様子というものはそれほど目立たず、言葉の違いも少なく、北海道や本州の子どもたちと同じテレビのキャラクター（ここでは「ピカチュウ」）が大好きであった。

②学年構成メンバーが固定化される

幼稚園がほぼ義務教育的になっているので、島の子どもたちにはクラス替えが存在せず、先輩後輩もほとんど異動がない。島外の高校へ出るまでは、ほぼ同じメンバーで集団生活を行ってきたことになる。このような理由から、同学年内の人間関係が固定化し、それらが再編成される機会というのが稀である。つまり、幼稚園時代の人間関係におけるポジショニングが非常に重要である。さらに、競争関係になりにくいという状況もみられ

る。

③母親と教師の両役割とライフコースの類似

各幼稚園の先生方は、一園しかないということもあり人事異動がほとんどないために、幼稚園独自の「カラー」がきわめて強く反映される。すべての幼稚園教諭が女性であり、大半が地元の出身者、そして既婚者であり出産の経験がある方ばかりであった。そして先生方は、島にいる限り幼稚園の先生という面と子どもの母親であるという側面、両方を常に背負わされている。常に「見られているという感覚」が、教師たちにとっては居心地の悪さとなっている。

これらの視点というのは、沖縄の離島に限らず、全国の離島にも共通するものかも知れないし、やはり沖縄独特の様子であり、他の島々ではあまり当てはまらないことなのかもしれない。そこで本稿では、まず保育所や幼稚園の子どもたちの生活という観点から利尻島の地域特性について概観するとともに、北辺の離島の子どもたちの生活とあそびに関連する総論的な検討を加える。そして次に、宮内氏の提示した視点に基づき、それらが利尻島の子どもたち、さらにはそれらを取り巻く状況に照らし合わせてみて該当するものであるかどうか検討を加えていきたいと思う。

Ⅲ. 調査地（利尻島）について

1. 地理的・歴史的背景

海面から直接立ち上がっているかのような利尻山(1721m)を本体とする利尻島は、北海道北部、稚内市の西約50kmに位置している(図1)。島の行政区域は東側の利尻富士町、西側の利尻町に二分されており、山すその周囲60km余りの沿岸部に点在する集落に7500人余が居住している。

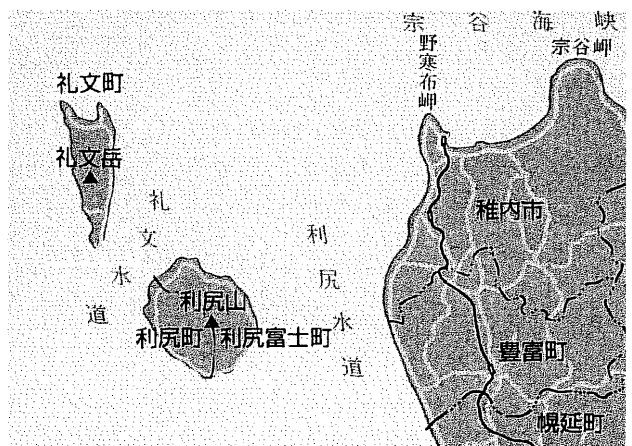


図1 利尻島の位置

現在の主要な産業は、漁業と観光業である。漁業の主力商品は昆布とウニであり、それらは全国的に見ても大変有名なブランドとなっている。年間の観光客は40万人以上ともいわれており、島の外周を巡る道道には本島からフェリーに乗ってやってきた観光バスが、数多く走っている。島と稚内とを結ぶフェリーは1日2～4往復運行されている。ここ15年間で人口が約3分の2になり、過疎化と少子高齢化が進んでいる。

さて、この利尻島を歴史的に見ると、初めて公式な記録に登場するのは17世紀の中頃であるという*1。寛文10年(1670)の「津軽一統志」では、松前の商船が利尻島に訪れ、アイヌと交易を行っていることが記されている。この記録より、当時からアイヌが島に居住し生活をしてきたことが知れる。しかし和人はまだこの島におらず、彼らが利尻島で生活をするようになるのはさらに後の事となる。明治2年(1869)の新政府発足とともに、「蝦夷地」が「北海道」と改称されたが、この頃は夏場の出稼ぎだけのために島を訪れる者がほとんどで、永住者はまだいない状況だった。明治11年(1878)、利尻郡に鴛泊^{おしどまり}、石崎、鬼脇^{せんのうし}、仙法志^{せんほうし}、杓形、本泊の六村が設置される。そして明治32年(1899)に杓形戸長役場が設置された。これが島の西側にある利尻町の開基とされ、1999年に開基100年を迎えたところである。なお、昭和31年(1956)が杓形村と仙法志村の合併が行われた年で、行政上の区分として利尻町が誕生した年となる。

島外との関係で述べると、現在では稚内からの航路が主要な交通機関となっているために、そちらとのつながりが最も深い。利尻島民も、週末には稚内へフェリーで出かけ、買い物などをしているということである。よく稚内で買い物をしていると、島の人たちに出会うことが結構多いという。保育所で観察をしているときに、子どもたちに稚内のことを聞いてみたことがある(記録1)。

<記録1：乗り物ごっこ> 11/7 9:26～30

(自由遊びの時間。ホールでアクションジムの飛行機に見立てながら、乗り物ごっこをしている。年長のRy児と年中児Kh、年少児Kt、他3名。すべて男児。)

観：どこ行きますか？ 今日はどこへ行きますか？

Ry：稚内。(といいながら、ブロックで作った操縦桿を操作している)

観：稚内、よし稚内行くぞ！

Ry：(操縦桿を作り直しながら操作している)

観：はい、皆さん乗ってくださいよー。出発しますよー。ブーン。

今日は壊さないでよ、Ryくん(昨日、操縦桿が壊れたことを受けて)。

Ry：うん。

観：ブーン、成功してますか、成功ですか？

Ry：稚内行きですよーね？

観：そうです、稚内行きです。ブーン。稚内は近いかな、遠いかな？

Ry：遠い。

Kt：稚内、遠いー。

(Ry、5秒間位、操縦に熱中している)

Ry：あっ、見えました！(ジムの穴から外を覗きながら)

観：見えた？ 稚内見えてきた？

Ry：じゃ、着陸しまーす。

観：はい、着陸してくださいーい。

(3歳児たちは、ジムの中にいながらも別な遊びをしている)

Ry：はい、着きました。

観：到着だって、みんなー。着陸したよー。

観：(Ryに向かって)成功？

Ry：(観察者の方を見ながらうなずく)

(1分間ほど、ビデオカメラの前に集まり、「見せて」と言ってくる)

Kh：出発だよー。

観：さあ、今度はどこへ行きますか？

Kh：うーん？

観：いまは稚内ですよ、今度はどこへ行きますか？

Kt：札幌。

観：おっ、札幌まで行く？札幌は遠い、近い？

Kt：とおーい。

観：そうか、とおーい。

この記録からみると、子どもたちの稚内に対するイメージというのは「遠いところ」らしい。これは1つの事例であるから一般化はできないが、子どもの頃の距離感で言うと、週末に船で通うところだとしても遠出をしているというイメージがあるのだろう。我々が子どもの頃の記憶として、「ずいぶんと遠くまで来たな」という感覚を持っていた場所が、大人になってから行ってみると、実はそれほど遠い場所ではなかったのだと言うことが分かるように。

以前、利尻には小樽からの航路があり、大変賑わっていた時期もある*3。当時、「日本海には時化がない」と言われていたという。それは実際に時化がないという意味ではなく、どんなに海が荒れているときでも船を出し

*1「利尻町開基100年記念誌 利尻百年物語」1999 利尻町を参考にした。

*2「観」とは観察者、「保」は保育者のこと。以下の記録は全てこの表記で統一する。

*3「小樽利尻、礼文、航路 閉航記念誌」1995 利尻郷土史研究会を参考にした。

たということからくる。それは一度船を出すことによって相当な儲けがあったからであり、逆に船を出さないことにより、大きな損害が出るということが分かる。

その他、夏場にだけ航行する千歳空港からの定期航路があるが、こちらは主に観光客向けのものであり、地元住民が経常的に使うものではない。しかし日常的に飛行機を使うと言うことはなくとも、緊急の時には活用できるという意味から、道央圏との心理的な距離感は縮まったであろう。

2. 乳幼児の生活背景と予備調査

我々は2001年6月に利尻島を訪問し、島内の5か所の保育所および1か所の幼稚園について、訪問したり、主任クラスの保育者や役場の職員など関係者と面接するなどして、実情の聞き取りを行った。役場、観光施設、商業施設などの集積地域にある利尻富士町立鴛泊（おしどり）保育所、利尻町立沓形（くつがた）保育所が50名前後の入所児を擁する一方、利尻富士町立鬼脇（おにわき）保育所、利尻富士町立本泊（もとどまり）保育所、利尻町立仙法志（せんほうし）保育所は、入所児10～20数名という、こじんまりとした規模で運営されている。いずれの地域でも、乳児期から保育所に入所するわずかの例外を除いて、乳児期を家族の保育のもとで過ごし、3歳程度以上になると保育所で集団生活を送るというのが、育児の慣習となっているようである。

鴛泊地区には、園児が5歳児のみ約20名という利尻富士町立鴛泊幼稚園がある。この地区では、4歳までは保育所、5歳になると幼稚園という分担が暗黙のうちにできている。また、幼稚園でも保護者の要望に応じて保育時間を延長するなど、保育所との内容上の差異は小さくなりつつある。

親たちの多くは公務員、教員、建設・運輸業、観光業などに携わる給与所得者および兼業漁業者で、専業の漁業者はほとんどいないということであった。保育者はいずれも利尻島出身者であった。

6月に利尻町、利尻富士町の5保育所と1幼稚園を訪問した際に、それぞれの園の概要について話を伺ってきた。今回の打ち合わせではそれを踏まえて、11月に再度訪問する際の訪問園を検討した。そもそも都市部（札幌近郊）と離島（利尻島）では、子どもの遊び方やそれを通した人間関係の形成の仕方が異なるのではないかという仮説のもとに今回の調査を始めているので、今回観察をする園も、都市部のように大人数の子どもが通う園ではなく、小規模の園を我々は希望している。結果的に我々としては、利尻富士町立鬼脇保育所と利尻町立沓形保育所を11月5日～11月10日まで訪問したいということで話がまとまった。

また、もし利尻の子どもたちの遊び方に何か特殊性が見られたとした場合、それが地域の特質によるものなのか、それとも都市部と同様に時代と共に変化をしてきたものなのかが現在の子どもたちを調べるだけでは分からない。そこで利尻在住の年輩の方から昔の遊び方についても話を伺いたいということになった。利尻町立博物館で出している紀要「利尻研究」には、かつての子ども調査の論文が掲載されており、また島民の方が書いた自費出版の本には昔の遊びの様子が記されていることが分かり、そちらを入手し文献研究も進めていくということとした。

IV. 研究方法

以下の2つの方法にてデータ収集を行ったが、ここでは自然観察によって得られたデータを中心に分析を行う。

1. 自然観察

子どもの遊びの様子を知るために、島内にある2か所の保育所で参与観察を行った。時期は11月6日～9日までの4日間。時間は、おおむね子どもたちが集まり始める8時半から、ほとんどの子どもたちが降園する16時までの間である。それぞれの保育所に2名ずつ観察者が入り、1名はビデオ撮影、もう1名は子どもたちの中に溶け込んで一緒にしながら、子どもたちに話を聞いたり共に遊んだりした。

2. 聞き取り調査

現在の子どもたちの遊びは保育者に、かつての遊びは年配者に聞き取りを行った。年代は40代から60代、70代までの方々。6名の方々に、それぞれ1～2時間をかけてインタビューを行う。記録はカセットテープレコーダーを用いた。

V. 事例及び考察

1. 保育の形態について

実際に利尻島に行ってみて印象的だった事は、降所の様子の違いである。夕方4時になると大半の親が迎えに来て、子どもたちは一斉に降所する。この光景を見たときに、我々が都市部の幼稚園で見慣れていた光景だと感じた。この事は、親が遅くまで仕事をしているという理由で保育に欠けている子どもは、案外少ないという事を示唆している。都市部では保育園は、保育に欠ける、つまり親が仕事等で面倒を見る事の出来ない子どもが入園

している事が多い。しかし利尻島の子どもたちは、保育に欠けているから保育所に入るというよりも、集団に慣れさせる為や、周りの子どもが保育所に入っているから自分の子どもも、という面があると推測される。このような傾向は都市部の様な大きな都市にはないが、離島独自のものというよりも過疎地には共通して見られる事かもしれない。保育所に4時までいるので、家に帰ってから友達の家へ遊びに行くということも少ない様子であった(記録2)。

<記録2：だらだらゴッコ> 11/7 11:28~30

(一斉活動が終わり、隣の部屋で先に遊んでいる年長女兒2名。ジグソーパズルをしている。)

観：いつもお家帰ってから、何して遊んでいるの？

Yi：いつもー？だらだらゴッコ。

観：そう、誰とやるの？

Yi：1人。

観：1人で(少し笑いながら)。

Yi：だって、だらだらゴッコだもん。

観：だらだらごっこってどうやるの？

(返事がない)

観：だらだらするの？

Yi：うん。お兄ちゃん遊んでくれないんだもん。

観：お姉ちゃんはいないの？お兄ちゃんだけ？

Yi：うん、お兄ちゃん全然遊んでくれないんだもん。

観：そうかー…。

(5秒間沈黙)

観：お友達のうちに遊びに行ったりしないの？

Yi：行くよ、Hiちゃんの家とか。

観：Hiちゃんとお家近いの？

Yi：自転車で行ったら速い。

観：うーん。でも冬だからね、冬は自転車乗れないでしょ。

Yi：でもYi、この前乗ってたもん。

観：ふーん、Hiちゃんのお家行ったときは何して遊ぶの？

Yi：なんかー、いろんな事。この前はどれみちゃんのゲームとかやった。

(Hi, Yiに耳打ちをする)

Yi：あとは内緒。

2. 「お片付け」からみえる地域社会の環境

次に印象的だったのは、利尻島の子どもたちが自由あそびの後で片付けをする時の様子である。お片付けの声がかかると、都市部の子ども達は遊びに夢中で片付けが出来なかったり、自分の使っていたものを片付けたら他の子と遊んでしまったりする様子が見られた。しかし、島の子どもたちは「お片付け好きなの？」と思ってしまう程、夢中になって片付ける。他の子が使った遊具も一緒

に隅々まできれいに進んで片付けていた。この傾向はとりわけ年長の子ども達に顕著だった(記録3)。

<記録3：キリンさんに任せて> 11/7 12:02~12:08

(自由遊びの時間、年長年中がそれぞれにパズルをしている。お片づけの時間と保育者が言うのだが、まだ途中なのでなかなか片づけ始めない。)

保：そろそろお片づけ、お願いします。途中で終わるお友達は、窓の所にパズル置いて…。

？：いやー、まだやるー。

保：お昼ごはんだよ。お片づけ始めてねー。

(片づけを始める子もいるが、まだやり続けている子もいる。1分間くらいこの状態)

Yu：Yuに手伝ってほしい人？

(KkとAi同時に)：はい。

(YiがAiをYuがKkのお片づけを手伝う)

観：お片づけだってよー。

(2分間、みんな雑談をしながらこの状態)

Chi：早くしまえてー。

観：お片づけだよー。

Kk：Kkに手伝ってほしい人ー？

(誰も返事をしない)

Yu：Yuに手伝ってほしい人ー？

(返事がない)

Yu：よし、行っちゃおう(保育室に戻る)。

Ry：Ry、もうさっきやってたのできちゃったんだよ(観2に見せる)。

観2：へー、ほんと。すごーい。

(Ryは自分のパズルを片づける)

Ry：どれ、どれどれ、ここはわいねー。

(と言いつつ、年少児の所へくる)

Ry：貸しなさい。

Di：早くー。

Ry：ほら。

Di：早くー(先生に早くするように言われてきている)。

Ai：よし、できた。

(みんなが手伝おうと1人の所へやってくる)

Mu：みんな集まるとできなくなるー。

(もめ始める)

Ry：ここはさ、おおきいキリンさん(年長)に任してよ。

だって4人も集まってやったら、みんなバラバラになるから。

Kh：どけてって。

Ry：もういいって、ここはRyとKkとHrでやるから。

Kh：あと2枚ー。

(Khだけは未練がある様子。あとの年少児は1人ずつ保育室に戻っていく)

この様な共同体への積極的な貢献の姿勢は、野田（1991）が紹介している、アドラーの「共同体感覚」を連想させる。アドラーは「共同体感覚」について3つの事を言っている。まず第1には「私は共同体の一員だ」という感覚。「所属感」と呼んでも良いだろう。第2には「共同体は私の為に役立ってくれるのだ」という感覚。「安全感」とか「信頼感」に近いと言える。第3に「私は共同体の為に役立つ事が出来る」という感覚。「貢献感」とも言える。利尻島の子どもの片付けの様子はこの「所属感」「貢献感」が強く表れているのではないだろうか。強い「共同体感覚」があるという事は、子どもたちが生活する共同体の中で、しっかりした居場所が出来ているという事を意味している。この様な「共同体感覚」が子ども達に育まれる島特有の環境要因があるのだろうか。

我々は、例えば日頃買い物に出掛けたりすると、大勢の「知らない人」に出会う。それが当たり前の生活になっているだろう。しかし島の人達は、島での日常生活の中で「知らない人」に出会うという事が少ない。実際、我々が島を訪れた時、移動の際に随分と島の人達から「じろじろと見られている」という感覚があった。島に滞在している間私達は、島の人達の自家用車を借りて移動をしていたのだが、その車に持ち主ではない「知らない人（私達）」が乗っていたので、島の人達は不思議に思ったという事のような。島の人々から私達は実際に見られていたのである。その車の持ち主が誰なのか、多くの島の人達が知っている。だから、連日その車で島を半周していた私達が、島の人々の注目を浴びた訳である。島に限らず、人口の少ない地域では、都市部と比べて地域の人々の結びつきが強く、匿名性が低い。その様な地域では島で私達が感じた様に、どこに行っても知っている人の目に触れざるをえないという、一種の窮屈さが当然生じてくる。また、他地域から物理的に隔絶された離島という環境では、子ども達のほとんどは、高校までを島で過ごす。その為、「おとなしい子」「リーダー格の子」「チョロチョロしているいたずらっこ」等、保育所でついたイメージがそのまま続く事があるようだ（記録4）。しかし、島の子どもの達はその様な「小さなコミュニティ」の中で生活していく。その事が地域の共同体への所属感を強め、共同体に貢献する行動を強化していると考え事も出来るだろう。

<記録4：やりたくない> 11/9 15:40~54

（ホールでの自由遊びの時間。男児は年長年中が混じり合い、戦いゴッコを始める。Kkが観3に何か耳打ちをしている。）

（Kk：Ryのお尻を軽くたたく）

Ry：お尻ペンペン。

（Kkのお尻をたたく、強め。Kkはお尻を突き出すような格好でおどける。Ryは変身のポーズ、思い切り蹴り上げる。しかしKkはやめずにお尻を突き出している。観も痛そうとは思いつつも、その仕草に笑っている。）

Kk：プリプリ星人（といいながらお尻をふる）。

Ry：やーっ（と言って跳び蹴り）。

（そこに年中男児も加わってKkを追いかけ回す。そこから追いかけっこが始まる。）

Kk：ねえ、仲間に入って。

観：何の？

Kk：戦いゴッコ。

観：えーっ、戦いゴッコ。おじさん負けちゃうもん。

（そこにRyが来て、ビデオを見ようとする。Kkも一緒になって見ようとする。）

Ry：やめろー（と言ってKkを強くたたく。「ドン」と音がする。）

観：いくらなんでも、それは痛かったんじゃないの？

Ry：ごめん、ごめん（間違っただったようで、悪そうにしている。そのままどこかへ行ってしまう。Kkも別な場所へ。）

（先ほどの続き、追いかけてっこをしている。1分間ほど続く。）

（Kkが「悪者を退治してきたー」と言いながら近づいてくる。）

観：Kkは何者？

Kk：悪者。

観：Kk、自分でやりたかったの、悪者？

Kk：うん。

観：いい者の方がいいっしょ。

Kk：（観察者に向かって）仲間に入ってー。

観：悪者の？

Kk：うん。

観：おじさん、悪者じゃないもん。

Kk：入って、入ってー（と言いながら走り去る）。

（「やめろ、やめろ」と言いながら年中男児とじゃれ合う。そこへ年長のRyがやってき掴みかかる。年中の子たちはKkに襲いかかる。）

（Ryはいなくなるが、年下の子どもたちがKkを追いかけ回す。3分間ほど続くが、Kkは決して年下の子たちには本気で手は出さない。）

観：Kkはやりかえさないの？

Kk：やりかえすに決まってるだろー（と言いつつまたじゃれ合うが、手は出さない）。

（アクションジムの所へ1人であるので近づいていくと、観のお尻をKkがたたき出す）

観：お尻ペン、お尻ペン。

（そこへ年長男児のHrが来て、Kkに掴みかかる）

Kk：放してよ、放してよー（とおどけた口調で言いながら逃げる）

（Kkの姿が1分間くらい見えなくなるが、その後観3のところで何かを話しているところが映っている。）

(それから再び、年中児と追いかっこをして逃げ、アクションジムへ。観、近づく。)

Kk: いつも Kk, 怪獣にされてる。

観: うん?

Kk: いつも Kk, 怪獣だ。

観: 怪獣役なの, Kk はやりたくないの, 本当は?

Kk: 本当はね, やりたくない。

観: 怪獣じゃない方がいいんだ。

(Kk, うなづく)

観: みんなが怪獣やれっていうの?

Kk: うん。

観: 嫌なんだ。

Kk: 嫌なんだけど, 怪獣やれって言われる。

観: どうすればいいんだろうね。

(Kk, 考えている雰囲気。そこへ年長女児の Ai が来る。)

Kk: なんでだよ, なんでだよー (と Ai に言う)。なんでだよって聞いてんだよー。

Ai: あのね, みんなが怪獣やりたくないから。怪獣やりたくないってねー……。

観: みんなやっぱやりたくないんだよねー。

Kk: やりたくないに決まってるわい。

観: ねー。Kk はすっかり怪獣になっちゃうんだ。やりたくないって, 言ったことある?

Kk: ある。

観: そしたら, どうだった?

Kk: やっぱりね, 戦いやってくれって言われる。

観: やってくれって言われるんだ。

Kk: いっぱね, 戦いやってくれって言われる。

観: 戦いはあんまり好きじゃないんだ。

Kk: いや, 戦いは好きだけど, 怪獣は好きじゃない。

観: ああ。

(Kk と呼びかけられ別な遊びを始めようとしたとき, お片づけの音楽が流れる)

3. 園ごとの保育と生活の文化

片付け1つを取ってみても, 子ども達は「ここではこうするものだ」という園でのルール・振る舞い方を, 入所してから, 他の子達がやっているのを見て覚えていく。例えば, 島の子ども達が「お片付け」の声がかかったとたんに片付けに熱中する姿も, その様に, 年長児から年少児へと伝わり, 子ども達が保育年数を重ねていくにつれて, 身に付けていく。教育心理学の世界では「正統的周辺参加」(Lave & Wenger, 1991) と呼ばれるこの様な現象の積み重ねにより, それぞれの園にその園の固有の生活文化が形成されていく事になる。別な保育園での事例だが, ブロックの遊び方でも同じ様な事が言えると思われる。限られたお部屋の中で限られたブロック

で遊ぶ時には, 年長児あたりでは「この人数のこのお部屋で戦いごっこをすると, 狭くなってしまう」「お部屋では, ホールほど走り回ってはいけない」等, それまでの園生活の中で, そこでのやり方を身に付けている様に見える事にも, この様な見方を当てはめる事が出来る。

私達は島特有の保育を期待して島を訪れたが, 島の2ヶ所の保育所でもその保育の内容にはたくさんの違いがあり, いくつかの点を除けば, 保育の違いは島と都市部の違いとしてくくる事が出来ないと感じた。つまり, 園ごとの保育文化の違いとして解釈した方が良い様に思われる。

4. なぜ幼稚園は一年保育なのか

宮内氏の考察に基づけば, それは義務教育の一部だから, との結論としてよいだろう。しかし, 利尻の場合はさらに深い理由がそこにはあるように思われる。なぜなら, 小学校へ入る準備として一年間を通うのならば, なぜ保育所ではいけないのだろうか。それまで2年間なり3年間なりを通ってきた保育所で, そして自分たちよりも年齢が低い子たちもいるその場所で, なぜいけないのだろうか。近年は保育所と幼稚園の保育内容というのは, それほど変わらなくなってきている。幼稚園教育における自由保育の隆盛, それが一つの理由となるであろう。たぶん, 我々が両施設の保育の一部分を観察したとしても, それが保育所なのか幼稚園なのかは分からないかもしれない(もちろん午睡やおやつの時間を観察すれば別だが)。ほぼ同じような内容で行っている両施設で, なぜ一年間だけ単年度保育を行わなくてはいけないのか。ある幼稚園の先生にお話を聞いたところ, 「それまでのように, 遊び中心で上下関係もあるが皆で仲良く遊ぶという雰囲気から, お兄さんお姉さんになったのだから小学校へ入るための心構えをつくるのです」, ということをおっしゃっていた。確かに表向きはこのような理由があるかもしれない。しかし, 私が不可解なのは, 小学校に入っても1年生から6年生までがいるという縦の社会に入っていくのに, なぜ横だけの社会にするのか, ということなのである。幼児教育での縦割り保育(異年齢児が保育をともに行う)の重要な意味というのは, 改めてここで述べるまでもないだろう。「見てまねる」という, 学習過程を想起した場合にでも, その重要性は容易に想像できると思う。そこには, 行政的な問題が絡んでいるのではないかと推察する。沖縄の場合, もしか保育所が島に一つもなく, 幼稚園だけが一園存在するのであれば, 宮内氏の考察に異論はない。しかし, 保育所が少なくとも1つ以上あるのだが, その保育所には年長児がおらず, 年長児はすべて公立の幼稚園に行っているとしたならば, これは特殊な事情が絡んでいるように思わ

れる。ご存じのように、幼稚園は教育関係の施設であり、保育所は福祉関連施設として押さえられる。それは、国レベルで見ると幼稚園が文部科学省、保育所が厚生労働省の管轄であることから一目瞭然である。この国の区分に倣い、都道府県や市町村でも両施設を管轄する部署が異なっている。端から見ると、それぞれの部署において、似たような施設を持っていることになる。普通の感覚ならば、一つに統合してしまえばよいのではないかと思うかもしれないが、なかなかそうはいかない。遙か以前より、この「幼保一元化」という課題は、保育関係業界の問題として取りざたされているのだが、一向に進む気配がない。そこには、二つの大きな省のなわばり争いが働いているように思えてならない。このような国レベルの大きな問題が、小さな島の中でも同じように起こっており、裏を返せば、小さいからこそそこを乗り越えることができにくい状況にあるのではないだろうかと考えられる。

宮内（1999）で詳細に記された沖縄離島部の幼稚園では、1年保育ではなく2年保育が主流で、今後は3年保育を行えるように準備を進めているという。これは沖縄島との状況とは異なっており、どうも保育所の役割も同時に兼ねている様子が垣間見られる。宮内氏が述べるように、離島の幼稚園が沖縄島の幼稚園とは「異なった原理で動いている」という意味は、そこにあるのではないだろうか。氏の記述によれば、渡嘉敷島には保育所もあるということが分かる。「渡嘉敷島では幼稚園と保育所の関係は良好である」とし、「どちらも公立であり、（中略）互いの往来が行われている」という。島の幼稚園は、「ほぼ100%に近い就園率」（p.116）ということであるから、そうすると渡嘉敷島の保育所には年長児が存在しないことになるだろう。もしこれが現実であるならば、これは利尻島で最も大きな地区である鴛泊の幼稚園と保育所の関係と同様な状況となる。ここの辺りに、何か離島としての共通項を探るためのヒントが隠れているのではないだろうか。沖縄の幼稚園・保育所の実態については、沖縄島や離島部を含めて、こちらは何も資料を持っていない。しかし、どうやら沖縄島と離島部ではその事情が異なっているようだ。ここではこれ以上の考察は避けるが、今後、保育所の実情との関係から考察されることを望みたい。

VI. おわりに

利尻島と他地域の子どもたちを対象とした生活や気質の地域比較には古田と太田の一連の研究（1994, 1999）があるが、利尻島の子どもたちの育ちの独自性を強調できるほどの差異を示すことに成功しているとはいえない

い。また、幼稚園を対象にしている点で、より私たちの興味と近い沖縄県離島部に関する宮内論文でも、“島の独自性”が思いのほか目につかないという意外性が語られている。メディアが発達し文化的な均質化が進んだ現在の子どもたちの生育環境においては、浜崎（2001）が沖縄県伊是名島で見出した育児文化のように顕在的な“島ならではの独自性”を島嶼文化の歴史も浅い利尻島に期待することに、そもそも無理があるといえよう。

実際、聞き取りにあたって私たちは、島独自の子ども遊びなどがあるか、という質問をしたが、「自分が子どものときにやっていたような磯遊びなどは、今の子どもたちはしなくなってきている。遊び方はよその地域の子どもたちとあまり変わらないのではないか」との回答が多かった。研究を続けていくほどに、「果たして離島の独自性というものはあるのだろうか、本道内の過疎地域にも共通する点があるのではないだろうか」という疑問も生じてきた。しかし、私たちはむしろ、子どもたちのあそびや人間関係の微視的な部分に注目することで、子どもたちの発達とその生活環境との相関が見出せる可能性があると考えている。それは、あるいは島の独自性というよりは過疎地域に共通するものということになるかもしれないが、そのような検討は、広大な過疎地域を抱える北海道における子どもたちの育ちを捉える上で、重要な視点を提供することにつながるはずである。私たちは現在利尻島における調査を継続中であるが、それと並行して、北海道内の他地域への調査の拡大を構想している。

VII. 謝 辞

今回の調査に際し、お忙しいところご協力下さった利尻町及び利尻富士町の保育所職員の方々、元気な子どもたちに感謝申し上げます。約1週間に渡り、朝から夕方まで観察をさせて頂き、時には子どもたちと一緒に遊んだり昼食を食べたりしながら、生活を共にすることができました。この論文の着想の多くは、その生活の中から導き出されたものとつくづく感じております。どうもありがとうございました。

またこの度の調査・研究は、平成13年度北方圏生活福祉研究所の特別研究費助成を受けて行われたものです。長期に渡る観察を可能にしてくれた研究所並びに研究費助成制度に感謝し、ここに記してお礼申し上げます。

引用文献

請川滋大・滝澤真毅 2001 幼稚園教育において「環境」はどのように捉えられているか 北海道浅井学園

- 大学短期大学部研究紀要第40号
菅野幸恵・岡本依子・亀井美弥子 2001 離島における
母親たちの育児環境とネットワーク(1)－東京都小笠原
村に在住する母親に対する質問紙調査から－ 日本発
達心理学研究第12回大会発表論文集
野田俊作 1991 続アドラー心理学トーキングセミナー
－勇気づけの家族コミュニケーション 星雲社
浜崎幸夫 2001 常民の保育システムの研究(8)－魂領域
の空間構造と子育て－ 日本保育学会第54回大会研究
論文集
文野洋・尾見康博・可知直毅 2001 小笠原の子どもた
ちの自然意識－動植物の知識について－ 東京都立大
学小笠原研究年報24号
古田倭文男・太田光洋 1994 利尻島・礼文島の幼児の
性格(気質)特徴 利尻研究(利尻町立博物館年報)
第13号
古田倭文男・太田光洋 1999 利尻島・礼文島の幼児の
特徴と育児態度 利尻研究(利尻町立博物館年報)第
18号
宮内洋 1999 沖縄県離島部における幼稚園生活のエス
ノグラフィー的覚え書き 北海道大学教育学部紀要第
78号
Lave, J. & Wenger, E. 1991 *Situated learning: Legiti-
mate peripheral participation*. Cambridge, MA :
Cambridge University Press. 佐伯 胖(訳) 1993
状況に埋め込まれた学習 産業図書
〔2002年6月11日受理〕

Young children's daily life and play in the northern community : A preparatory study in Rishiri island

Shigehiro Ukegawa Masaki Takizawa Takaharu Yuki
Northern Region Research Center for Human Service Studies

Abstract

To research on children's daily life and play, we visited a northern isolated island, Rishiri island. We had inter-views with nursery and kindergarten teachers, observed children in nursery schools. It seems there was no unique or traditional play different from outside of the island. But we found some characters within children's human rela-tion and custom in the island. We think that these characters are generally connected with the depopulated com-munity.

Keywords : isolated island, community environment, nursery school, children's play, human relation